

小櫃川流域の自然と歴史

柴田龍司

1. はじめに

西上総地方の君津市・木更津市・袖ヶ浦市を流れる小櫃川流域では、近年開発行為に伴う発掘調査が急増している。そのようななかで、たまたま県内では原始・古代に比べ格段に調査例が少ない中世遺跡の発掘が、小櫃川流域という共通したエリア内で当文化財センターによってあいついで実施された。しかも、それぞれの調査成果は単独でも中世史研究にとって大きな意味をもつものであるが、小櫃川流域に立地する中世遺跡の視点でそれぞれの遺跡を考えると、よりダイナミックな歴史動向がとらえられるのではないかと、調査担当者の間で話題となった。

そこで、本誌で特集を組んでみることとなったが、遺憾せんここで取り上げた3か所の遺跡はいずれも調査が終了したばかりで基礎整理にも入っていない状況のため、やや先に結論ありきの感となってしまったが、報告書作成にむけて本誌をたたき台としてとりあえず提示したい。

2. 小櫃川について

小櫃川は、東上総地方と安房地方の境い近くにある元清澄山に源を発し、君津市久留里地区および木更津市馬来田地区を北流し、袖ヶ浦市平川地区で大きく西に流れを変え、木更津市の北方金田海岸で東京湾に注ぐ。流長75kmで県内の河川では最長である。

上流域は、砂質凝灰岩を刻んで渓谷地形をなすが、流路を西へ変えるあたりから河口までの間は15kmほどの距離を幅3～4kmにわたって西上総地方では珍しく広範囲な沖積低地を形成している。

沖積地内には、小櫃川がいくどとなく流路を変えたため方々に自然堤防の高まりを残しているが、そのような微高地上に史料に見られる中世村落が立地している。また袖ヶ浦市平川地区に顕著にみられる低平な台地上にも中世館跡がいまも多く残されている。小櫃川右岸の袖ヶ浦丘陵上には式内

社であった飯富神社が、左岸の木更津丘陵上には中尾城跡、笹子城跡の中世城跡があり、中世を通じて資料に恵まれた流域である。

3. 小櫃川流域の中世史概観

鎌倉期

古代には中～下流域が望陀郡、中～上流域が畔蒜郡から成り立っていたが、この頃には望陀郡内には菅生荘（中流域左岸）、飫富荘（中流域右岸）、金田保（下流域）が、畔蒜郡はほぼ全域が畔蒜荘としてすでに成立していた。

菅生荘は近衛家領、飫富荘は得宗領、畔蒜荘は熊野山領として史料にみえ、金田保は国衙領であったと考えられる。

南北朝期～室町期

この時期は金田保と畔蒜荘に関する史料が多く残されている。

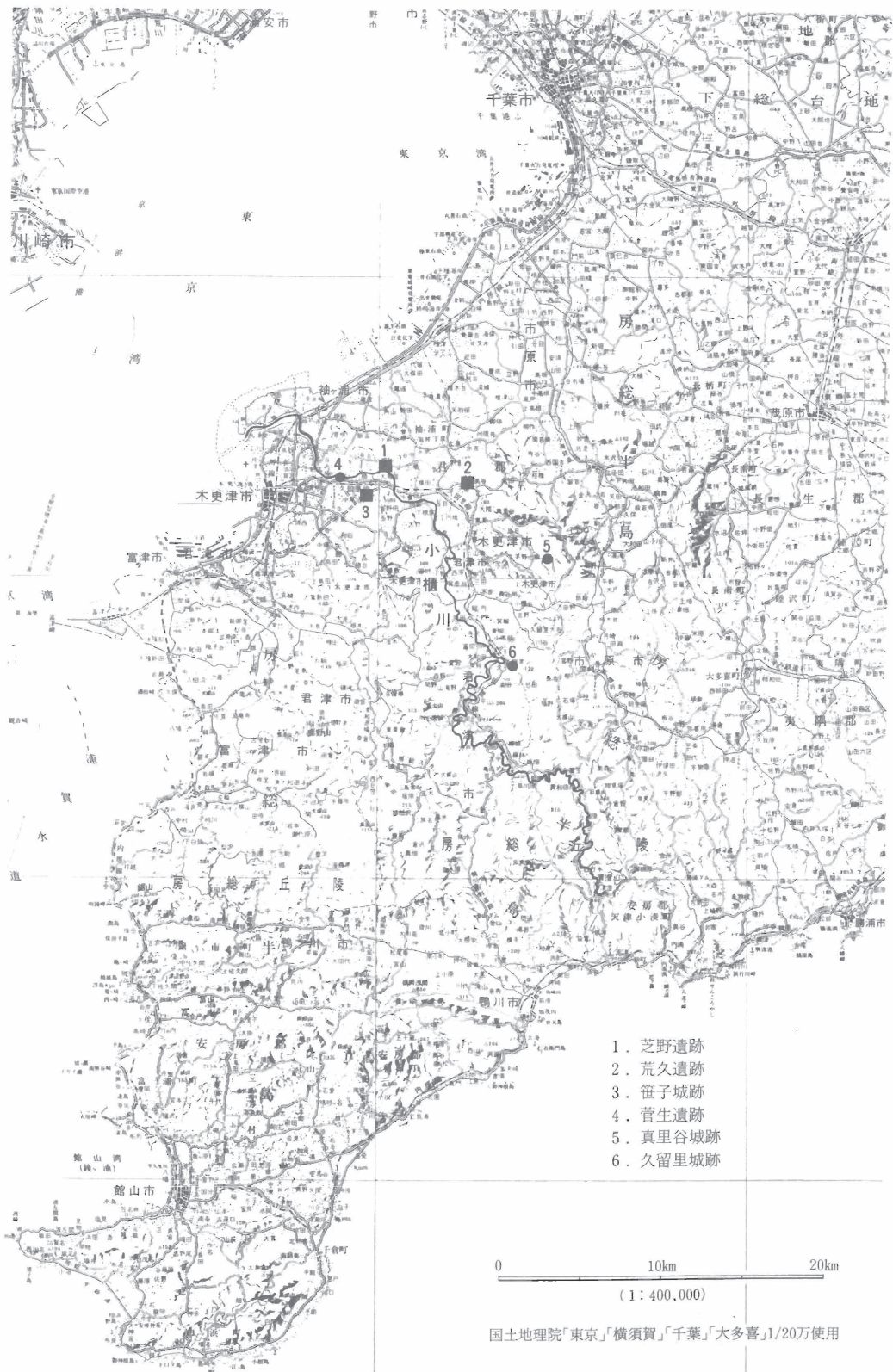
金田保では、保内の大崎村が応永3年（1396）以降幕府政所頭人伊勢貞信から鎌倉円覚寺領に、高柳郷が同じ頃金沢称名寺領へと変っている。また畔蒜荘内では、南荘（上流域）の亀山郷が弘安6年（1283）に北条時宗により円覚寺に寄進されて以降、応永26年（1419）足利持氏によって安堵されるまで、円覚寺領として史料上確認できる。

当地域のみならず、西上総地方は地理的に鎌倉と一衣帯水の関係のため、時の政治権力と密接した関係のもとでの領有形態であった。

戦国期

上杉禪秀の乱（応永23年・1416）、永享の乱（永享10年・1438）等を通じ、鎌倉の求心性がなくなるとともに当地域は政治的に空白状況となり、その間隙を衝く形で公方勢力として武田氏が入部し、小櫃川中流域に位置する真里谷城を本拠に短期間のうちに西上総地方を領有した。

天文7年（1538）の第一次国府台合戦以後真里谷武田氏は衰亡したため、当地域は里見氏と後北条氏の二大勢力の境界に位置することとなった。



第1図 遺跡位置図